福井の幕末明治、歴史秘話

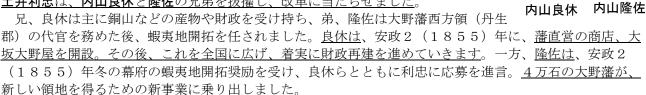
<第28号>

平成29年6月20日発行

新領地を求めた大野藩の挑戦〜蝦夷地開拓と大野丸〜

白山の支脈に取り囲まれた越前大野。今回は、この地を治めた大野藩が、<u>幕末に藩</u>の命運をかけて取り組んだ蝦夷地開拓と洋式帆船「大野丸」の建造を取り上げます。

江戸時代の終わり頃、大野藩は全国の諸藩同様、莫大な借財に苦しんでおり、<u>藩主</u>、 **土井利忠**は、**内山良休と隆佐**の兄弟を抜擢し、改革に当たらせました。



安政3 (1856) 年、隆佐は、30余名からなる探検隊を率いて現地にわたり、調査。開拓の人員・資材、交易品運搬のため、外洋を航行できる洋式帆船が必要との結論に至りました。隆佐は、幕府の許可を得て洋式帆船の建造に着手。安政5 (1858) 年、竣工し、翌年3月、敦賀・箱館間を初航海しました。

当時、洋式の船の建造は全国的にほとんど例がなく、<u>大藩でもできないことを小藩が成し遂げたと「出群の所置(群を抜いている)」と称されました</u>。名前は、利忠が「大野丸」と命名。<u>製造費用は</u>、蝦夷口掛硯日払帳によれば、<u>7,239両(現在のお金で約2億円)で、大野屋の売上金から支払われたといいます</u>。

隆佐の蝦夷地開拓の戦略を窺い知れるエピソードが残っています。隆佐は、"<u>今年はともかく来年からは「損失」が出ることはなく、大野屋と大野丸・奥地開拓がうまく噛み合えば、結局「大利」を得る</u>"と見通していました(内山隆佐書状)。安政3(1856)年に箱館大野屋を開設し、翌々年、北蝦夷西海岸の開拓が許可されたことで、交易と開拓の両輪で事業を進めていったのです。<u>開拓の収支はトントンだったと言われていますが、隆佐が見通したとおり、箱館大野屋での交易は、明治6(1873)年までの17年間で約2万両の利潤を上げました</u>。大野丸は、敦賀、大樟、三国の港から、大野産の米・たばこのほか、反物、和紙、漆器などを蝦夷地に運び、地場産業の育成にも貢献しました。

万延元(1860)年、ついに、北蝦夷西海岸が大野藩準領地となります。しかし、その4年後の元治元(1864)年6月、隆佐が病気で亡くなり、8月には、大野丸が根室沖で座礁、沈没しました。人と船を失った大野藩でしたが、開拓はその後も、明治2(1869)年まで継続されました。

日露戦争後から第二次世界大戦までの間、日本の領土だった樺太。<u>大野藩の人々が苦心した足跡は、当時</u>、樺太庁により鵜城(うしょろ)史蹟として指定され、しっかりと樺太に刻まれていたということです。

<参考資料> 『若越山脈』 (第二集(内山隆佐)、第六集(内山良休))、福井県史通史編4近世二

~幕末ふくい歴史紀行~ [武家屋敷旧内山家]

・大野藩の財政再建に尽力した内山兄弟。二人の偉業を偲ぶため、後の内山家の屋敷を解 体復元し保存した建物です。庭園を眺めながら、お茶が楽しめます。

【住所】大野市城町10-7 (JR越前大野駅から徒歩15分) [入館料200円、お茶一席300円]



武冢屋敷旧内山冢

- ★お知らせ 松平文庫テーマ展「なまえのヒミツーその1 松平春嶽の場合ー」を開催中!
 - ・平成29年7月12日(水)まで、県立図書館の閲覧室入口で開催。
- ・福井藩主、松平春嶽の名前に焦点をあて、松平文庫資料から、その変遷や由来、あだ名や号を紹介します! 【住所】福井市下馬町51-11(TEL0776-33-8860) JR福井駅東口からフレンドリーバス県立図書館行乗車